



球磨川流域に 千年に一度の大水害が発生？



国土交通省は3月29日、球磨川水系で想定できる最大規模の降雨（千年に一度）があった場合の「洪水浸水想定区域図」なるものを発表しました。八代市の平野部はほぼ全域が水没し、人吉市の中心市街地は5～10mの深さで浸水するという、あり得ない洪水を机上で想定した資料です。そのような洪水では、川辺川ダムや国交省が進めようとしている治水対策は全く役に立たないことは明らかです。そして、「流域住民が自らの確に避難するしかない」と国交省は言い出したのです。

これまでに国交省は、人吉が大水害にあった昭和 40 年の洪水を持ち出し「本当はもっと大量の洪水が流れ、もっと甚大な被害に遭っていたはずだ」等という考えを展開してきました。そして、あり得ないほど大規模な川の拡幅案などの9つの治水対策案を発表し、今年1月には住民への説明会も開かずに住民の意見（パブリックコメント）を募集しました。住民の意見の多くは、「国交省の考えを理解できない」「ダムのない豊かな球磨川を再生させることが大切だ」等でした。

その後唐突に、国交省はあり得ない「洪水浸水想定区域図」を発表したのです。その背景の1つは、住民や専門家からも「過大である」と指摘されてきたダムや川の拡幅等の国交省の治水対策事業の正当化です。もう1つは、国の事業で防げなかった場合の住民の命を守る防災対策は「住民が自己責任でおやりください」ということです。

机上での想定を重ねて作りだされる大雨ー洪水ー水害で住民を脅しても、決して住民の主体的な防災意識は育ちません。過去に、球磨川流域住民に主体的な防災意識が育っていたのは、住民のくらしの中に川があったからです。大切なことは、くらしの中に豊かな球磨川を取り戻すことであり、普段から川をながめ、川に関心を持つことが住民の防災意識を育むものだと考えます。

●2016年5月～2017年5月の出来事

16. 5. 29 第3回川に学ぶ「春の小川を探る」(頭無川、出水川にて)
 7. 6 川辺川利水事業の縮小計画案を関係6市町村が了承。
 7. 11 川辺川、国交省の調査で10年連続水質日本一に。
 8. 31 第19回川辺川現地調査。120名参加(相良村総合体育館)
 10. 22 川辺川ダム計画から50年「川を語るシンポジウム」開催
 10. 23 第4回川に学ぶ(球磨川・川辺川上流一帯にて)
 10. 26 第5回球磨川治水対策協議会、国交省の9治水対策案「単独では対応不可能」
 12. 26 第6回球磨川治水対策協議会、パブリックコメント資料を検討。
-
17. 1. 6 国交省が球磨川治水対策パブリックコメント募集を開始。
 1. 20 球磨川治水対策協議会パブリックコメントに関する抗議文を提出(熊本県庁)。
 3. 21 第7回球磨川治水対策協議会、6つの治水対策案の組合せを検討。
 3. 22 球磨川治水対策協議会 第2回 整備局長・知事・市町村長会議
 3. 29 国交省が八代平野がほぼ水没する浸水想定区域図を公表。
 4. 8 国営川辺川利水事業の廃止と計画変更に伴う同意取得開始
 5. 18 1000年に一度の洪水シミュレーション等について意見書を提出(熊本県、国交省八代河川国道事務所)

●球磨川治水対策協議会が治水組合せ案を検討



パブコメに関し抗議文提出 2017.1.20

国交省と熊本県、流域12市町村で、川辺川ダムに代わる治水対策を協議する「球磨川治水対策協議会」がこれまでに7回開かれ、私たちはその全てを傍聴しました。

国交省はダム代替の検討対象としていた9つの治水対策案では対応が不可能として、今年1月に住民から意見(パブリックコメント)を募集しました。

ところが、パブリックコメントを書くための資料は国交省のホームページ等で閲覧するようにとのことでしたが、資料を見ると膨大で分かりにくく、「手渡す会」では説明会を開くよう抗議文まで提出したのですが、結局何の説明もありませんでした。

3月に開かれた協議会では、「引き堤」「河道掘削」「堤防かさ上げ」「遊水地」「市房ダム再開発」「放水路」6つの治水案の組み合わせを検討することを流域の12市町村長らが了承。住民がパブリックコメントで出した、「鋼矢板による堤防強化」や「森林の保全」などの意見は切り捨てられました。

●第3回川に学ぶ「春の小川を探る」



川に学ぶ「春の小川を探る」2016.5.29

手渡す会は、自然が豊かな球磨川の再生を目指す取り組みの一環としてシリーズ「川に学ぶ」を開催しています。第3回は、球磨川支流の頭無川、出水川にて「春の小川を探る」をテーマに取り上げました。

春の小川は明治45年につくられた文部省唱歌ですが、現在の川のあり方を議論する上でいろいろ話題になっています。

球磨川の豊かさを支えているのは球磨川の支流であり、その支流の支流です。今回は、人吉市を流れる球磨川の支流やその支流を見て歩きながら、「詩にうたわれた春の小川と何がどう違っているのか」「何のために川は変えられてしまったのか」などを探ってみました。翠嵐楼（温泉町）の西側で球磨川に注ぐ出水川は、護岸も自然そのまま水は清く、本当に素晴らしい小川でした。

その後のくま川ハウスでの学習会では、手渡す会の黒田弘行さんの講義をもとに、ドイツにおける川の再生に関する話題や、農水省や他府県では「春の小川」についてどのような取り組みがなされているか、等の話題も取り上げました。

●会計報告(2016. 1. 1～2016. 12. 31)

収入の部	金額	備考
繰越金	57,602	
年会費・カンパ	453,824	グッズの売上、雑収入なども含む
合計	511,426	

支出の部	金額	備考
郵送費	72,243	会報発送、資料発送
交通費	18,800	高速料金、ガソリン代
事務用品費	6,287	紙代、印刷機使用費他
事務所維持費	153,199	家賃(電気代含)、電話代
ダム計画から50年シンポ	237,303	会場費、講師交通費、講師宿泊費他
その他	18,325	香典、インターネット利用料他
合計	506,157	

(収入) 511,426 - (支出) 506,157 = 5,269

◇皆様のご支援のおかげで、今回も赤字会計から脱することが出来ました。心よりお礼申し上げます。年会費払込用紙(一口1000円)を同封させていただきました。今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

川辺川ダム計画から50年 川を語るシンポジウム開催



川を語るシンポジウム 2016. 10. 22

昨年10月22日、1966年の川辺川ダム計画発表から50年を機に「川を語るシンポジウム」を人吉市東西コミセンで開催しました。

まず、手渡す会の黒田弘行さんが基調報告。流域住民が今後取り組むべき2つの課題として、「自然が育む豊かな川を取り戻す」と、「住民のくらしに川を取り戻す」ことを主張しました。

毎日新聞記者で川辺川ダム反対運動のバイブルとなった「国が川を壊

す理由」の著者・福岡賢正さんが「川辺川ダム計画50年を見つめて」と題して講演。2001年からの「川辺川ダムを考える住民討論集会」で、住民側が「八代では国交省の進めるフロンティア堤防（壊れない堤防）をつくれれば川辺川ダム建設は不要」と主張したことを受け、国交省は壊れない堤防をつくる計画を全て抹消した事実を解説。「鋼矢板を打ち込む等の壊れない堤防づくりを進めれば、ダムは必要ない」と強調しました。

続いて今本博健・京都大学名誉教授（河川工学）が「非定量治水のすすめ」と題して講演。「高度成長期に全盛を誇ったダムの時代は終焉に向かいつつある。実現可能で、河川環境に重大な影響を及ぼさない対策を積み上げるべきだ」と話しました。

編集後記 最近の国交省は、自分たちのやってる事業を住民に説明しようとする姿勢が全く見られません。川辺川ダム事業計画で建設省（当時）はダム説明会を何度も開き、最終的には住民討論集会まで開きました。2007年には、球磨川河川整備基本方針の説明会（川づくり報告会）を流域の地区ごとに53か所で開催しました。川づくり報告会における発言者数（887人）の中で「治水のためにダムが必要」と発言した人はたった4人（全体の0.5%）だったことがショックだったのか、その後は全く説明もせず、資料も配らず、パブリックコメントもホームページを見て書け、という姿勢です。説明もなく、対話もないまま事業を進めて、果たして誰のための事業だというのでしょうか。住民のために事業を進めようというのなら、まずは住民と対話をすべきです。（N.O.）